

ベティ・ページ

2007(平成19)年12月5日鑑賞(東映試写室)

★★★



監督・脚本=メアリー・ハロン/出演=グレッチェン・モル/クリス・バウアー/ジャレット・ハリス/サラ・ポールソン/カーラ・セイモア/デヴィッド・ストラザーン/リリ・テイラー/ジョナサン・M・ウッドワード/ノーマン・リーダス/ケヴィン・キャロル (ファントム・フィルム配給/2006年アメリカ映画/91分)

……裏マリリン・モンローと呼ばれた、天真爛漫な笑顔とグラマラスな肢体、そして開放的で大胆なポーズ。大いに鼻の下を伸ばしながら、伝説のピンナップ・ガール、ベティ・ページのお勉強をしたいもの。しかし、なぜ50年後の今、彼女が注目を……？ そんな目で真剣に考えれば、彼女の儚くも数奇な人生と、時代の潮目の転換が見えてくるはず……。

君はベティ・ページを知っているか……？

こんな小見出しをつけたのは、私は全然ベティ・ページという名前を聞いたことがなかったため。ベティ・ページは1950年代、「裏マリリン・モンロー」と呼ばれ世界中の男性を虜にした、永遠のピンナップ・ガールの名前。私は常々、映画は勉強だと強調しているが、そんなベティ・ページの勉強なら、男性は誰でも楽しいはず。ベティ・ページは「最も多くの被写体となった女性」とのことだが、その愛くるしく天真爛漫な姿態は最高！ こんな楽しい勉強ならいくらでも……。

1923年テネシー州ナッシュビルで生まれたベティ・ページは、敬虔なクリスチャンの家庭に育ち、ティーンの頃は賢く勉強熱心な生徒だったとのこと。ところが、大学進学と結婚に失敗し、心機一転新しいスタートを切るためにニューヨークへやってきた時、偶然カメラマンの被写体となることでモデルのキャリアをスタートさせたとのこと。さて、それ以降のベティ・ページの人気沸騰ぶりは……？

この映画はそんなベティ・ページの快進撃を魅力いっぱい描いていくが、プレスシートを見ると、私の目には実物のベティ・ページよりも映画でベティ・ページ役を

演じたグレッチェン・モルの方がずっとキレイで魅力的……？

何はともあれ、大いに鼻の下を伸ばしながら、こんなベティ・ページのチャーミングな肢体をタップリと楽しみたいものだ。

楽しい話ばかりではなく、現実は……？

映画の冒頭の時代は1955年。舞台はニューヨークの本屋。男性向け雑誌を熱心に品定めしている1人の男性客は、店長に対して「もっと特別なもの」はないのか、とおねだり。すると店長は、客の品定めをするような目を注いだ後、隠された引出しからある特別な雑誌を。すると、客は「もっと特別なもの」を要求。店長はさらに……。こりゃ、ちょっと怪しそうと思ったら、案の定……。

天真爛漫な笑顔とグラマラスな肢体を堂々と世界の男性の前にさらし、最高のピンナップ・ガールとなっていた人気絶頂のベティ・ページは、他方で縛りやムチといったSM写真にも登場していたわけだ。そのため、お固い上院議員で大統領選挙にも野心を燃やすエステス・キーフォーバー（デヴィッド・ストラザーン）によって、1955年以降調査の手が……。そして今、ベティ・ページは聴聞室の外の廊下に1人座り、委員会に呼ばれるのを待っていた。

こんな出会い、あんな出会いが……

何ゴトでも、またどんな世界でも人間が成長し成功するためには、人との出会いが大切。そして、成功する人間は実力だけではなく人との出会いに恵まれていることが、この映画を観ているとよくわかる。

ベティ・ページを最初に被写体にしたのは、警官でカメラマンをしている男ジェリー・タイプス（ケヴィン・キャロル）。これによってベティ・ページは天性の才能に気づくことになり、以降彼女は男性用雑誌や個人コレクターのためにポーズをとり、絶大な人気を集めることに。

ベティ・ページのキャリアを一気に高めたのは、アーヴィング・クロウ（クリス・バウアー）とその義理の妹ポーラ（リリ・テイラー）との出会い。ハリウッド・スターの顔写真と映画のスチール写真を売っているクロウ・ファミリーの一員として、ベティ・ページはさまざまな仕事をこなすことに。もっとも、ここでSM写真を撮っていたことが後に問題を起こすことになったのだが、無邪気で無防備なベティ・ページ

にはそんな危険は全くわからなかったらしい……。クロウ・ファミリーの一員としてベティ・ページは、才能ある英国の写真家でありイラストレーターのジョン・ウィリー（ジャレッド・ハリス）や世界的なモデルのマキシー（カーラ・セイモア）とも出会うことになった。

堂々とセミヌードのモデルを続けて人気を博していたベティ・ページは、さらにフロリダの人気写真家バニー・イエガー（サラ・ポールソン）にも気に入られ、バニーとも仕事をするに。フロリダの野生動物公園で2匹のチーターと一緒に写っている有名な写真は、1954年にバニーが撮ったもの。また、同じくバニーが撮影したサンタクロースの帽子だけをかぶり微笑むベティの姿が『PLAYBOY』誌で1955年1月のグラビアを飾ったことによって、ベティ・ページの名前は一躍全米に知れわたることに。

興味深いベティの信仰

ベティがモデルとして大活躍したのは1950年から57年までの7年間だけで、以降きっぱりとモデルの仕事を辞めてしまったのは実に残念。しかし、それは一体なぜ……？

その理由の1つが、上院からのワイセツ図書への規制強化であり、ベティ・ページへのバッシングであったことはまちがいないが、この映画を観ていると、どうもそれだけではなさそう。そのポイントは、彼女の信仰心。ベティはもともと敬虔なクリスチャンだったうえ、保守的な1950年代のアメリカで惜し気もなく男たちにヌード姿をさらすことは、そのような信仰心と矛盾するのではと私などは思ってしまう。しかし、どうも彼女はそうではなく、セックスシンボルになることと信仰心は両立していたらしい。

ところが、ある日を境に彼女は突然猛烈な普及活動に立ちあがることになったから、それは一体なぜ……？ 私がこの映画からそれを十分理解することができなかったのは少し残念だが、そんなベティの信仰心のあり方は非常に興味深いもの……。

ベティの演技者としての才能は……？

この映画の中には、男性雑誌のモデルとして人気を集めながら、他方ではグリニッジビレッジの演劇スタジオに入ってスタニスラフスキーの演技論を読み、熱心に演技



『ベティ・ページ』DVD、5/23(金)～発売中。¥3,990(税込)

の練習に励んだベティの姿が映し出される。そんな姿を見ている限り、ベティの演技者としての才能も豊かなように思えるのだが、それを伸ばすことができなかったのは、一体なぜ……？

その点についても十分な解答がこの映画から得られないのは、少し残念……。

女性監督がなぜ……？

この映画は1953年カナダ生まれのメアリー・ハロン監督によるものだが、なぜ女性監督が50年以上前のピンナップ・ガールに興味を示したの……？ プレスシートによると、1993年にはじめてベティ・ページの話を知ったメアリー・ハロン監督が興味を持ったのは、第1に彼女のセックスと宗教面、そして第2に一時期世間から消えたかに思えたのに、また表舞台に浮上したこと、だった。

プレスシートには数点の「ベティ・ページ論」があるが、これはこの映画がつけられたためにまとめたもの。多分男性監督の目では、ベティ・ページの被写体としての魅力ばかりに目を奪われ、なぜ7年間の活躍で忽然と姿を消してしまったのかという彼女の内面にまで切り込むのは難しいはず。その点、女性のメアリー・ハロン監督は、セックスシンボルとしてのベティ・ページを楽しく思い出するためにこの映画をつくったのではなく、逆にわずか7年間という絶頂の時代の儂さと、1950年代という時代に翻弄された数奇な運命、そして信仰を中心とした彼女の内面を描き出そうとしていることは明らか。しかして、その点の切り込みは……？ 2007(平成19)年12月21日記